グローバル・コスモポリタン社会と文明史の稜線
―社会変動としてのグローバリゼーションをめぐる環境社会学的視座構築の試み―

佐　藤　研　一*

1．問題の所在
2．グローバリゼーション
3．ギデンズの議論
4．文明史の稜線
5．ま　と　め

1．問題の所在

アンソニー・ギデンズは、グローバリゼーションを「社会変動」としてとらえ、「工業社会」ないしは「近代社会」から「グローバル・コスモポリタン社会」へと移行するプロセスであることを示唆している。そして、こうした複合的な変化の根底に、情報関連技術の驚異的な進展や、東西冷戦の終結に加えて、「自然の終焉」とギデンズが呼ぶ、地球温暖化に代表される地球環境問題を全人類が共通の課題として直面せざるをえなくなった状況の到来が、その本質的な特徴として指摘されている（Giddens 2003, 2013）。

こうしたギデンズの議論を含め、グローバリゼーションに関する議論は、1990年前後以降にはじまったものであり、元々、同時代論的色彩の強い、共時的モデルをベースとするような議論が中心のものであった。その後、そこに、通時的モデルをベースとするような議論が徐々に加わり、それなりの進展を示すにいたり、さらには、そもそも1990年前後以降に、グローバリゼーションとい事象そのものを確認することはできないという議論まで唱えられるようになっていく。

その一方で、当初からの議論の焦点であった、目前の「時代の変化」と映る事象の動きそのものは止まるどころか、益々、その動きを強めているようにしか思えない。共時的モデルベースの議論のなかでさえ、早い時期に見られた、グローバリゼーションをアメリカ中心の「新自由主義」の浸透プロセスとしてとらえるような議論は今や影を潜め、今度は、意味合いを180度転換させて、ア

＊　国士舘大学 21世紀アジア学部 教授

メリカなどから、中国やインドなどの海外の新興地域に「経済」的な繁栄が奪われていくプロセスとしてのグローバリゼーションが、危機感をともなって、取り沙汰されるようにさえなってきている。

実態面で見ると、これまで、貧しいままに取り残された世界人口の８割の人々が暮らす地域を巻き込んだ、「経済」的繁栄の浸透プロセスとしてのグローバリゼーションが進んでいるように映る。

もし、グローバリゼーションが、こうしたプロセスであるとすれば、アメリカなどで懸念される賃金水準低下などの危機は、グローバルな単一市場での「一物一価」の原則による、健全な価格調整の類ということになるのかもしれない。物価の問題も、同様の傾向に加え、スマート・テクノロジーによる、より高性能かつより低価格を基調とするビッグバン級の破壊的なイノベーションの進展などによる効果なども与した結果であるかもしれない。何れにせよ、これまでの枠組をこえた事象が展開しているように映る。

そして、こうした「経済」的繁栄の次元と深い関わりをもちながら、ギデンズの指摘にもあったように、「地球温暖化」にともなうグローバルな「気候変動」の動きもまた顕著となり、こうした共通の課題をグローバルな次元で共有せざるをえない状況が生じている。「繁栄」も「リスク」も、人類史上はじめて、グローバルな次元で、全ての人類が共有せざるをえない事態が訪れており、先述の「経済」的繁栄を支えるばかりでなく、それを実現するための、情報処理や情報通信技術を軸とするスマート・テクノロジーの進展も、2015年以降の中国主導の「ソーラーパネル革命」をはじめとして、今や、それなりの水準にいたり、「脱炭素化」をベースにした新たなトレンドを産み出そうとしているように映る。

こうして、状況の推移を顧みる時に、アンソニー・ギデンズによる議論がいかに示唆に富むものか、改めてよくわかる。1990年前後以降に展開しはじめ、グローバリゼーションと呼ばれるようになってきた事象は、紛れもなく「社会変動」であることが明瞭になってきたからにほかならない。

「社会変動」とは、「社会構造」そのものの転換によって、ある「社会類型」から別の「社会類型」への移行を意味する。かつて「伝統文明」ないし「伝統社会」として知られる「社会類型」から、「工業化」をともなう「近代文明」あるいは「近代社会」への移行などは「社会変動」であり、目下、そうした移行に匹敵する、「近代社会」から「自然の終焉」を前提とした「グローバル・コスモポリタン社会」への移行が進行中だということになる。

そこで、本稿では、ギデンズの示唆とギデンズの議論以降に進展した状況や議論が明示することとを重ね合わせる作業を中心に議論を進める。ギデンズの議論は、「歴史化」に向かった議論の潮流の再整理をうながす一方で、そうした議論が素通りしてしまった、「自然の終焉」の決定的な意義を浮かび上がらせ、グローバリゼーションの議論における、「社会変動」としての側面と、「環境社会学的な視座」の構築の可能性への気づきをもたらすことになる。

また、そうした気づきが、「伝統文明」と「近代文明」が描く「文明史の稜線」についての再検討をうながし、そうした再検討が、今度は再び、グローバリゼーションをめぐる議論の場における、新たな理解の導出をうながすことにつながっていく。「グローバル・コスモポリタン社会」と

いう「社会類型」の輪郭が明確になることで、「社会変動」の軌跡を見通すマクロヒストリー的な視点に大きな変化をもたらし、そうした軌跡のなかに位置づけることで、グローバリゼーション理解のための視点に大きな変化をうながすことになる。

2．グローバリゼーション

「歴史化」をめぐって

そもそもグローバリゼーションとは、その出発時の議論がもっていた共時的な関心という傾向にもかかわらず、通時的なモデルでしか意味をなさないプロセスを指し、「歴史」が絡む要素を内包している。1990年前後以降、グローバリゼーションが盛んに論じられるようになって以来、議論は、様々な次元に展開してくことになったわけだが、すでに述べたように、グローバリゼーションの開始の時期をめぐって歴史的に遡るような議論を中心に、グローバリゼーションの「歴史化」の動きもまた活発になっていった。

「経済」の次元での議論においても、1990年前後以降に展開する事象をグローバリゼーションと呼び、その問題性を追求するような議論も盛んに行われ、当初は、新自由主義の押しつけによるアメリカの勢力伸長の動きとして糾弾され、その後、アメリカを脅かし、格差を拡大させ、中間層を破壊する、中国をはじめとするアジアなどの台頭の動きとして、これはこれで、排斥すべき事象として論じられるようになった。また、統計データに基づく「実証的な研究」として、1990年前後以降、グローバリゼーションが生じている事実はないといった、経済史的な視点からの議論も盛んに行われたが、さらに、こうした議論にも変遷があって、当初は、左派系の研究者がこうした議論の担い手だったとされるが、その後は、ビジネススクール所属の経営学者などによる、マルキシズムのスキームとは異なる枠組みからの議論が主役を担うようになっていったように思われる。

このように、グローバリゼーションの議論に「歴史」の次元が大きく絡むのは、その「内包」の問題に加えて、もうひとつには、それ自体に、しかも、ふたつの次元で、「歴史」が生じたからにほかならない。ひとつには、グローバリゼーションをめぐる議論自体に30年という「歴史」が生まれ、もうひとつには、そもそも、グローバリゼーション の名でとらえようとしてきた事象自体にも、30年という「歴史」が生じたからである。

こうした諸潮流のなかで、単純に、グローバリゼーションの基点の設定に絡む論点に注目すると、大きく５つほどのタイプに分けることができる。それぞれのタイプに、仮に呼称を付してみると、ひとつ目が、「グレートジャーニー派」、もうひとつには「大航海時代派」であり、さらに、「経済データ派」、「±90派」、そして、「グローバルヒストリー派」ということになるだろうか。

具体的には、最初のタイプは、グローバリゼーションの起点を、数十万年前の人類の誕生の時点に置く、主として先史時代を専門とする研究者による「グレートジャーニー」とグローバリゼーションとを結びつけた、人類史はそもそもグローバリゼーションの歴史だったとする立場であり、「大航海時代派」は、15世紀頃にはじまる「大航海時代」に起点を置く主に西洋近代史の専門家による議論を指し、「経済データ派」は、世界経済の貿易依存度などに注目して、19世紀に起点を置

くといった、経済史家など中心の議論を指す。このように、ほとんどあらゆる時代に関心をいだく専門家が競うようにグローバリゼーションの議論に加わることになったわけだが、さらに、「歴史」に興味を懐く地域研究の研究者を中心に、「各国史」などの縛りをこえた、「グローバルヒストリー」という視点から、人類史そのものをとらえ直そうとする「グローバルヒストリー派」の議論も現れてくる。

また、ギデンズのような議論に加え、「±90」以降の事象の特異性に着目する、「セカンドマシンエイジ」論や「世界はフラットだ」とする議論、「限界費用ゼロ社会」論、リーマンショック以降のマーケットの変化に焦点をあてた多くのエコノミストや経営学者の議論など、「±90派」と実質的に位置づけてよい関連の議論の厚みも増してきている。

こうした諸議論のタイプを、「±90」以降の解釈をめぐって、単純に「正」と「反」とに分類すると、「正」のグループには、「±90派」に加え、先に紹介した、経済格差の拡大などを糾弾する「反グローバリゼーション派」の議論などが入り、「反」のグループには、上に分類したその他のグループのほぼ全てが、少なくとも形式的には、入ることになる。

なお、形式的にはと述べたのは、一部の「経済データ派」の立論を除けば、ほぼ全ての議論が、「グローバリゼーション自体は、実は遥か昔々にスタートしていたんだよ！どうよ、驚いた？」といったセンセーショナルな建前とは別に、1990年前後以降の事象そのものを否定するわけでないために、例えば、こうした事象に対しては「グローバル社会の時代」とか「グローバリゼーション4.0」などといった具合に、それなりに配慮した「解釈」に向かうことになるためである。

つまりは、一見対立関係にあるように映るとしても、実際には概ね棲み分け可能な議論の隔たりがあるにすぎないということのように思われる。これに対して、「経済データ派」に分類できる一部の議論では、経済統計などの実証的なデータ上、「±90」以降において、グローバリゼーションは確認できないという明確な認識を軸に立論がなされるため、事情が大きく異なってくる。だが、それでも、「反」のグループの全てのタイプに関しても、考察の次元を変えると、共通項も確認できる。いずれのタイプもが、それら自体が「±90」以降の事象として、それは、必ずしも「±90」以降固有の「時代性」見ようということではないのだが、こうした議論自体が、少なくとも、科学社会学、文化社会学的な視点からすれば、「±90」以降の事象としてのグローバリゼーションの一環にほかならないと一括することが可能だからである。

「±90」以降の事象としての諸議論

クリフォード・ギアツが、「ロープの喩え」（L.ウィトゲンシュタイン）を用いて、「文化」の歴史的な構図について論じているように、「時代性」についての洞察もまた、「ロープの喩え」に倣って、再考される必要がある。換言すれば、どの時点にも、過去からの事象の、継続、消滅、未来に向けての事象の創発等が並立、共存し、どの事象に注目し、それらをどのように組み合わせるかによって、様々に「時代」の区分や「時代性」の像を結ぶことが可能になる。原理的には、同一の史的データ群を対象に、依拠する「文脈」や「理論」などによって様々な「時代性」の像とラベルを

見出すことができるのである。

1990年前後以降に顕著になった事象への関心に際しても、こうした「時代性」の像とラベルをめぐる、相対性、恣意性の問題に留意する必要があるのは当然である。言を待たずとも、「時代性」への言及には抗し難い魅力と強い確信の情感がともなうことになる。心理学者や行動経済学者ならば、間違いなく、ここにある種のヒューリスティックスとバイアスの問題の可能性を難なく見出すことだろう。そして、彼らの指摘を受けるまでもなく、そうした像やラベルには、短絡的で、恣意的な、往々にして、誤謬といっても差し支えない程度のお粗末な印象論にすぎないことが少なくない。

さらに興味深いことには、ダンカン・ワッツの指摘にもある通り、こうした印象論が、「常識」として君臨し、おそらくは、エドワード・サイードの説くところにしたがって、ミッシェル・フーコーが扱ったような「歴史」の次元に目を移せば、「ディスクール」として、あるいは、アントニオ・グラムシのいう「ヘゲモニー」として、長期間に及ぶ、目に見えない絶対的な「権力」の構造とさえ化すことになる。

ここでの議論において重要な点は、したがって、「±90」以降になぜ着目するのかという、その前提となる「文脈」や「理論構成」自体への眼差しであり、このことを論じようとする論者の「社会空間」における文化社会学的位相への再帰的な眼差であろう。

まず、最初の点についていえば、「グローバリゼーション」についての議論を「歴史」に絡めて俯瞰する時、社会変動論的な関心からの焦点は、1990年前後を境に「世界」は変わったのか否かという点であり、換言すれば、「社会類型」の転換過程が生じているのかということであり、こうした問題意識や理論的関心がその前提となっているということができよう。

そして、もうひとつの点に関しては、自らの社会的文化的位相に再帰的な関心をもち、自らの研究における「ディスクール」や「ヘゲモニー」あるいは、「パラダイム」やW.V.O.クワインのいう「全体論」との関係の問い直しを、時にサイードの議論を吟味しつつ、ダニエル・カーネマンらの教えを想起しながら、自らの研究が「特権的な存在」や「例外」となる根拠など何も存在しないことを忘れることなく、自らの意図や研究に対して社会空間内で担わされるはずの含意に対しても、常に意識を向けるよう努めるほかなかろう。

換言すれば、研究関心の外側に潜在するはずの様々な次元のフレームを意識する視点をもち、自らの議論自体の社会的、歴史的な位相を考慮しながら、現実構築の営みのひとつとして、自他の議論をとらえて論じていくことが求められているということもできよう。

元来、「歴史」の研究は、「常識」に大きく反して、常に困難に困難を極める。社会科学的な探求の場において、歴史的視点の導入が救世主になるどころか、議論の泥沼化を帰結するだけというのは十二分にありうる。

かつて、エドマンド・リーチは、歴史的データは、何かが成り立つことを示すものなどではなく、精々頑張って、何かが成り立たないかを示す可能性があるにとどまるにすぎず、こうしたデータを根拠に当時の状況を再構成しようとすることなど、そして、こうした再構成への挑戦こそ、考古学者や歴史学者の仕事そのもと考えられてきたのだが、まさに狂気の沙汰だろうという趣旨のこ

とを述べている。すでに事象が完結し、ことが定まった「歴史」は、厳密に扱えば、容易に真相を手にできるものだと考えがちだが、実のところ、多くのデータが消失し、風化や、断片化が進み、主要な「文脈」すら見出すことができず、リーチが指摘するように、厄介な問題の塊にほかならない（Leach 1990）。

さて、改めて、グローバリゼーションをめぐる諸議論が、「±90」以降の事象としての共通項をもつという議論に焦点をあてよう。

科学史、科学社会学的に見れば、グローバリゼーションをめぐる議論の展開そのものが、「経済データ派」とここで呼んだ、「経済」に絡む実証的な議論も含めて、1990年前後以降に進展する事象の一環そのものと映る。それは、学界を包摂する社会的なグローバリゼーションへの関心の高まりに呼応して、様々な研究者がその立場から議論に加わろうと試みた結であり、そしておそらくは、学術的な意義の次元とはまた別に、現実の「サイエンティストゲーム」の次元、具体的には、競争資金獲得というインセンティブに導かれた結果であり、ジャーナル掲載などのための戦略の帰結であって、こうした研究費の流れや一流ジャーナルの編集方針などを含めて、「±90派」がグローバリゼーションと呼ぶ事象が、この時期の社会科学や人文学の研究者の具体的な営為の次元で引き起こした影響の結果そのもの、換言すれば、グローバリゼーションとしてのグローバリゼーションの議論とでも呼ぶこともできよう。（だからといって、当然のことながら、様々な議論が産み出したそれぞれの学術的な意義や価値をそのまま貶めるということにはならない点には最大の留意が必要であろう。）

反「±90」的色彩の議論

先に触れたように、「経済」に絡む実証主義的な議論の一部では、1990年前後以降を起点と考える「±90派」に対して、一方的な「論争構造」を想定しているように映る。

こうした一方的な仮想論争を、やはり仮に、「世界はフラットだ」をめぐる仮想論争と呼ぶことにすると、この仮想論争の、仮想してまでも論争しなければならない事情というものがあるとすれば、そこにこそ、先に述べた、グローバリゼーションとしてのグローバリゼーションの議論という性格そのものが、しっかりと刻まれているように思われる。（それにもかかわらず、「論争構造」自体の検討を回避するわけにはいかないであろう。）

さて、ここでもち出した、「世界はフラットだ」というフレーズは、この「論争構造」のなかで「敵役」として取り上げられる、トーマス・フリードマンの『世界はフラットだ』での主張を指し示す。フリードマンの議論は、1990年前後以降顕著になった、情報処理技術とインターネットに代表される情報伝達技術とを使い、グローバルなスケールで展開される、萌芽的なビジネスの成功例の紹介とその可能性やその影響や帰結に関する考察であり、ここで使われている「フラット」という言葉の意味は、こうしたインターネットなどを駆使することで、グローバルなスケールで、現実の地理的隔たりなどあたかもなくなったかのように、いくつもの大洋で隔てられた、地球の裏側の大陸に、実際には暮らす人々同士が、あたかも同じ地平に立っているような、すなわち、地続きと

いう意味での「フラット」な場所で、ともに働き、様々につながって暮らす、新しいエコシステムの幕開けを指し示すことを目指した「文脈」のなかで「解釈」されるべきものである。

フリードマンによれば、今やインドとアメリカは、コロンブスの時代とは異なり、いわば、地続き（フラット）になったのだという。フリードマンは、コールセンターや家庭教師サービス、医療関連の専門的診断、会計処理や税務申告処理等の遠隔的なアウトソーシング等が、アメリカとインドの間で日常茶飯事化している現状を枚挙している。フリードマンの指摘は、格差の消滅や対等化などにあるのではなく、このように、あたかも同じ町でともに暮らすように、インド人の優秀な大学院生が、ムンバイに居たまま格安で、毎日ボストンにいる小学生の勉強につき合ってあげるような一体化が進んでいるということにある。考えるまでもなく、同じ町に暮らす人々の中には、富豪もいればホームレスもいるし、警官もいれば犯罪者もいるはずである。フリードマンのいうフラットとは、平等のフラットではなく、単なるこのような地続き化を意味する地理的空間でのフラットを指す（Friedman 2006：42-3）。

これに対して、少なくとも、一部の仮想論争では、「フラット」の意味が、別に用意された「文脈」で「解釈」され、結局、「スパイキーな世界」（リチャード・フロリダ）と対峙させられ、統計データをもって、「世界はフラットだ」などとは全くいえず、したがって、グローバリゼーションは生じておらず、「世界はスパイキーだ」ととらえるべきだというような主張が示されたりする。

しかし、フリードマン自身が述べているように、フリードマンの「文脈」での対義語は「ラウンド」であり、「スパイキー」ではない。フリードマンの主旨は、地球はコロンブスの時代と異なり、ネットのせいで、最早「ラウンド（丸いもの）」ではなくなってしまったのであり、つまり、「フラット（平坦）」になってしまいつつあるということにある。

影響力をもつ複数の論者が、フロリダの議論を引きながら、フリードマンを批判し、あたかも、二律背反かのような論調で、「フラットな世界」論は間違いで、「世界はスパイキーだ」と述べているが、引用元である、フロリダ自身は、同一チャプターの結論部分で、「世界」は、意外にも、「フラット」で、「スパイキー」なのだと述べている（Florida 2008：17）。

結局、ここで取り上げた仮想論争の論争構造は、イリュージョン以外の何物でもないように思われる。フロリダの指摘に示されているように、両者の議論は、むしろ相互補完的なものでさえあるように思われる。

フロリダを除く「スパイキーな世界」派の議論は、そこで採用された、グローバリゼーションの定義や「フラット」の語義、さらには、実証的なデータに基づく議論は整合的で、それはそれで、妥当なものであるというべきであろう。とはいえ、一般論として、こうしたデータ主義的な議論は、よくもわるくも、利用可能な統計データなど自身に、きわめて強く縛られる。実証的であろうとするあまり、議論を歪める可能性も小さくないことは、科学史的な経験知からも自明であり、一流ジャーナルへの掲載を意識しすぎるあまり、定義などに合わせてデータ自身を改竄するか、データに合わせて、定義などをズラせていくかという、どちらかの操作に心が動くことも、十分に理解できるし、現実に、不正の域までにいたっているとして告発される例も、分野を問わず、皆無ではない。

そもそも、科学史・科学哲学的な次元で、議論されてきたように、どのような理論に依拠するかで、データの意味が異なってくる、データの「理論負荷性」の問題があるのであり、まずは、それぞれの「文脈」そのものに、注力、留意すべきはずである。

改めて、こうした状況を考えると、いかに1990年前後以降、グローバリゼーションが、社会科学や人文学的な研究の領域に浸透していったかのかが、よくわかるように思われる。

また、同時に、こうした「経済」をめぐる実証的な研究が示すように、貿易依存度にみえるグローバルな結びつきの弱さや、ベンチャーキャピタル（VC）の投資圏のローカルな姿などは、実は、そのまま、グローバリゼーションの特徴のネガ像にもなっている。

データが語ること自体は、その通りである。調査や計算に大きな間違いがなければ、大方問題なく、大変頼もしいものにほかならない。

一方で、その解釈や、ここで取り上げたような利用に際して、様々な取り違えなどが生じる余地も生まれ、それ自体は必ずしも不正ではないし、フルーツフルな洞察をともなうことも少なくないが、利用可能な特定の数理モデルに乗せたいがために、結果的に、定義自体をズラしたり、書き換えてしまうことは珍しくない。しかし、その際、モデル自体の整合性は担保されるものの、極端な書き換えをすれば、その他の多様な経験的データとの間の齟齬は目も当てられぬほどに大きくなる。こうした場合には、モデルのためのモデルであり、数学的に意味があるとしても、そもそも科学的かどうかは、いささか疑問の余地さえ残る。それでも、研究者がこうした領域に身を置かざるをえないとすれば、それは、先述のように、グローバリゼーションを含む、現実の社会空間で生きる、「研究業績」等に絡む、生身の研究者の社会的アクターとしての「生」の軌跡の次元の磁場のためであるかもしれない。

それでは、「スパイキーな世界」派が用いたデータは、ネガとしてのそれを含めて、具体的には、何を意味していたのだろうか。

おそらく考慮すべきポイントは、次の２点である。ひとつ目は、経時的変化の次元での問題であり、もうひとつは、経済システムの変化の次元での問題であり、当然のことながら、両者には密接な結びつきがある。

最初の点について述べれば、グローバリゼーション30年の軌跡のなかで、事態は指数関数的に変化してきたといえる。統計データなどに頼る実証的な検証では、こうした変化の幅が大きいプロセスを対象とする際には、タイムラグという問題が大きく横たわることになる。３年前の血圧のデータで今日の健康状態を判断するような事態によく似たことにさえなりかねない。

実際に、数年の間に、想像が及ばぬほどに様相が大きく変化してきた。例えば、1990年代でさえ、今日のような中国やインドの台頭は、絶対にありえないとされてきた。BRICksの提唱者で、当時ゴールドマンサックスのエコノミストだった、ジム・オニールは、高名なハーバード大学教授のニーアル・ファーガソンから、そんなことがあるはずがないと嘲笑されたことをいささか誇らしげに回想している。その後の展開を見れば、中印の台頭はもとより、まさに、フリードマン的な議論の方向にことが動いているというほかはなかろう。

また最後の点についてだが、貿易依存度を指標とするこうした議論は、1990年前後以降のグローバルなつながりの中核が、インターネットなどによるものといったポイントが溢れ落ちる可能性がある。さらに、こうした指標を頑なに前提とすることで、「ニューエコノミー」の展開を「オールドエコノミー」の枠組で理解しようとする、取り違えに陥る可能性が高くなる。

「ニューエコノミー」では、金額ベースの数字の増減や物流における越境にかかわる数字の増減でさえ、そのグローバルな拡がりとその進展の度合いなどを測るには有効ではない。X線撮影の結果「何も写っていなかった」際の科学的解釈は、おそらく、「何もなかった」というものではなく「X線撮影ではとらえきれない何かがあった可能性は排除できない」というものであるべきだろう。そして、そこにあるものは、少なくとも「X線には反応しない物質」であるという条件を満たすものでなければならないという、ある種の姿を、ネガ像としてとらえているという表現も不可能ではあるまい。

こうした実証主義の問題は、かつての、クワインらの議論を含めた科学哲学上の議論を彷彿とさせるし、また、産業革命について、統計データに基づけば「産業革命」はなかったという主張をめぐる経済史上のかつての議論をも彷彿とさせよう。

そして、「±90」以降事象を検討する際の、決定的な問題点は、地球温暖化の深刻化などの環境ファクターの存在などをフレームの外に締め出すことにある。

グローバリゼーションを「±90」以降に見出す議論は、概ね様々な角度から見出そうとする傾向をもった議論であるように思われる。それに対して、実証主義的な批判の多くが、きわめて狭量な定義に基づいた議論である傾向が強いように思われる。実証主義的な批判の議論の立場からは、1990年前後以降起点論の多元性は、それこそが曖昧さの表れであり、科学的には排除されるべき悪しき態度の明確な徴候ということになるのだろうが、元来「こと」はそれほど単純ではないように思われる。

単純ではないということは、逆にグローバリゼーションを、ギデンズが示唆してきたように、「±90」以降に展開する社会変動としてとらえる眼差しからすれば、妥当性の表れということになろう。

3．ギデンズの議論

社会変動論の視点から

ギデンズは『暴走する世界』のなかで、実際の「近代」との大きな断裂を指摘し、『社会学』ではグローバリゼーションを社会変動としてとらえる視点を模索する。ギデンズは、それまでと1990年前後以降とを分ける点として、「伝統の終焉」と「自然の終焉」とをあげている。前者は、ギデンズの高名な「再帰性」の議論と直結するものだが、後者は、地球温暖化問題の深刻化などに直結する議論である。社会変動とは、「社会構造」そのものが根底から変化し、異なる「社会類型」に移行することを意味する。

ギデンズは、よく知られているように、タルコット・パーソンズ流の体系を批判し、デュルケー

ムやマルクスやウェーバーらが提示した社会学の原点再解釈の作業を通して、社会学的知見のアップデートを試みた。そして、その帰結として、社会学のメインテーマを社会変動への関心としてとらえ直すことにいたる。ギデンズによれば、デュルケームも、マルクスも、ウェーバーも、前近代から近代への移行に関する探求者として、結局、社会変動への関心がその業績の核心を貫くことになったということになる。そして、社会学のメインテーマが、社会変動であるとすると、社会変動としてのグローバリゼーションの問題は、現代の社会学的主題というほかないものということにもなる。

さて、ギデンズは、人類の誕生以降展開してきた「社会類型」として、「狩猟採集社会」「農耕・牧畜社会」「伝統社会」「近代社会」などの類型を採用している。なお、ギデンズは、実際には、「伝統文明」「工業社会」など、複数のものを連記し、「近代社会」にあたる類型ついてはさらに細かな区分を用いてもいるが、基本的な構図としては、ギデンズの類型論をこのようにまとめることに、少なくともここでの議論を行うに際して、大きな支障はないものと思われる。

また、こうした「社会類型」の名称の原型は、マルクスの議論に見出すことができようが、多くの点で、マルクスの議論とは一線を画すものにほかならない。まず、何といっても、これらは歴史的に可逆的な性格を否定しない「類型」であって、非可逆的な「歴史法則」による非可逆的な「段階」ではない点である。次に、「下部構造」が「上部構造」を規定するような唯物史観的な「社会経済構造体」としての理解はとらない。また、その変動の主因を「階級闘争」として理解するものでもない。

ギデンズは、グローバリゼーションを、ここで「近代社会」とまとめた「社会類型」からの社会変動として位置づけ、その先に「グローバル・コスモポリタン社会」が加わる可能性を示唆している。そして、この類型について次のように述べている。

「グローバル・コスモポリタン社会は、自然の終焉後に生じる社会である」（Giddens 2003：43）

そして、「自然の終焉」とは、工業化の結果招来する、人為的な影響をともなわない自然の終焉を意味し、地球温暖化をこうした状況の典型として扱っている。したがって、「人工リスク」が人類に重くのしかかることを指摘する。換言すれば、最早、気候変動による災害は、自然災害などではないという認識がここにはある。

ギデンズの議論のあらましを、簡単にまとめると、グローバリゼーションは、「近代文明／社会」から、「グローバル・コスモポリタン社会」に向けての社会変動であり、「近代文明／社会」から続くトレンドと「グローバル・コスモポリタン社会」へと続くトレンドとが並存し、交替していく過程としてとらえることができるということになろう。そして、ギデンズは、この時、「近代文明／社会」からのトレンドとしての「近代性」の徹底が、「暴走する世界」と表現出来るようなレベルになり、様々なリスクを増大させ、不安定な状況を生み出していると論じる。その一方で、「暴走する世界」を制御し、新たな「社会類型」の下での安定をもたらすための努力について、その重要性を説くことになる。

「自然の終焉」をめぐって

ギデンズは、先述の「グローバル・コスモポリタン社会」への言及を裏返すと、「近代文明／社会」については、「自然の終焉」以前の社会、「伝統の終焉」以前の社会として、とらえていることになろう。

実際にギデンズは、「近代」における「伝統」の揺るぎない残存について言及する。「科学」の受容も、結局、「宗教」に代わる「伝統」として受け入れられたに過ぎず、また、「計算」に代表される「近代性」は、「国家」などの「システム」の次元を呑み込みはしたが、「日常生活世界」には、先進国においてすら浸透しなかったとされ、「リスク」も「近代」になってはじめて認識されるようになったものではあるが、「保険」などに象徴されるように、あくまでも、コントロール可能なものとしてのそれに過ぎなかったことが指摘される（Giddens 2003：25, 42）。

また、工業化の進展が著しかったという点についても、主として先進国に限られた進展であり、「自然の終焉」がこうした工業化以降の営みの帰結だとしても、「近代」の大半を通して、「自然の終焉」以前の世界にとどまっていたのが、「近代文明／社会」ということになる。

「伝統の終焉」の原因について、ギデンズは、グローバリゼーションと相互補完関係にあるといってよい情報処理、情報通信技術の進展を念頭に置き、グローバリゼーションの進展にともなって、「近代性」の「日常生活世界」への浸透と、そのことによって、益々、世界のコントロールは、啓蒙主義者たちの予想に反して、困難の色を深めることになったとしている（Giddens 2003：38-9）。

つまり、「近代性」が、「自然」と「伝統」を切り崩し、こうしたこれまで人々の生きる基盤となってきたものの一切を「終焉」させ、最早、コントロール不能な「リスク」だけを増大させていくような、「暴走する世界」を出来させたということになる。そして、新たな変化に対してついていけない、従来型の諸制度が残存し、ギデンズのいう「貝殻制度」（Giddens 2003：19）と化して、混乱を高めていく。

ギデンズは、「伝統の終焉」にともない、ふたつの軸で、それぞれ対照的なふたつの傾向が生じると指摘する。ひとつは、自由な意思決定を謳歌する傾向と様々なタイプの「依存症」の蔓延であり、ふたつ目は、コスモポリタニズムを支持する傾向の出現と様々なタイプの「原理主義」を支持する傾向の台頭である（Giddens 2003：46）。

また、様々な社会制度が「貝殻制度」と化し、家族主義的な傾向の減退と個人主義的傾向の拡大の進行（Giddens 2003：51）、ギデンズが「民主主義のパラドクス」と呼ぶ、先進諸国で拡大する民主主義への失望傾向の高まりと、民主主義の世界的な拡大傾向の併存状態などが現れているとも指摘され（Giddens 2003：71-2）、混沌とした「近代性」の浸透が、「近代文明型社会」自体にとどめを刺し、「暴走する世界」としての「グローバル・コスモポリタン社会」の幕開けをもたらしているということにもなる。ギデンズがこうした議論を行った時点で、ギデンズの関心は、新たなコントロールが可能になる以前の、「暴走する世界」としての「グローバル・コスモポリタン社会」の入口の段階の混沌に向けられていた。

そして、「グローバル・コスモポリタン社会」を制御する、ギデンズのいう、新たなコスモポリ

タン型のモラル・コミットメントや、「民主主義の民主化」を軸とする、グローバルなガバナンスの構築が強く求められているという状況認識が示される（Giddens 2003：81-2）。

こうした議論の時点から、その後20年程の時を経るなかで、ギデンズの認識とは異なる、「グローバル・コスモポリタン社会」の様相の一部が、窺い知れるようになりつつあるように思われる。具体的には、「経済」の次元における変貌に関する認識である。

「経済」の次元における変貌

ギデンズの議論から20年近くを経た、われわれの「世界」は、すでに「経済データ派」の検討の際に触れたように、「経済」の次元で大きく転換してきたように思われる。このことは、当然のことながら、ギデンズの議論においても、その後の展開として、補足修正すべき論点でもある。「経済」の次元での転換の特徴を３点あげるとすると、以下の通りである。

まず、これまでの経済指標などでは捕捉困難な、「ステルス成長」とでも呼べるようなスマート・テクノロジーに由来する、「経済」の発展が進む点があげられよう。

次に、こうしたスマート・テクノロジーに導かれ、「限界費用」や「取引費用」などが下がり続け、シェアリング・エコノミーやプロシューマー・エコノミーなどの台頭も進展するなかで、ジェレミー・リフキンが指摘してきたように、「希少性」からの解放に向かって、「正のデフレスパイラル」とでも呼ぶほかないようなトレンドが展開しつつあるように映る。2015年以降の「ソーラーパネル革命」などによる、エネルギー転換の加速などが、こうした変化に拍車をかけることも考えられる。

そして、最後の点だが、「グローバルサプライチェーンのパラドクス」とでも呼びうるような事象が指摘できる。今日すでに様々なコモディティーが、グローバルサプライチェーンを前提に流通している。洗濯用洗剤から、コーヒー、スマート家電、醤油や納豆、衣料品や建材にいたるまで、多くの品々がグローバルサプライチェーンを通じて供給されていて、自宅側のコンビニエンスストアーや自販機、スマホやタブレットでアクセスする様々なショッピングサイトはどれも、いうまでもなく、こうしたグローバルサプライチェーンと直結する。当然のことながら、われわれのライフスタイルが、こうした、コンビニや自販機、eコマースを前提にそのかたちをなしているわけである。つまり、ローカルな、あるいはパーソナルな多様性がライフスタイルに色濃く実現することになるわけだが、それにもかかわらず、こうした多様性を可能にするものが、実に、このようなグローバルサプライチェーンにほかにならないからである。こうした傾向は、VCとその投資先間のローカル性の高さの問題などにも当てはまるように思われる。VCの資金自体、グローバルな金融市場や、クラウドファンディングなどと関係することは想像に難くないし、投資先の有望なスタートアップの選定に当たって、重視されるのは、間違っても、VCのオフィスに、物理的にどれだけ近いかではないはずだからである。

また、先述のように、グローバルなスケールで「経済」を考える時、「経済」のグローバリゼーションは、約８割の人口を占めていた「非先進諸国」と呼ばれてきた諸地域で、驚異的な「経済」

の成長をうながしてきた。その一方で、「先進諸国」では、ロバート・ライシュなどが警鐘をならす格差の拡大と、「中間層」の消滅の可能性などが色濃くなってきた感があるが、新たな富を築く高所得層の多くは、ニューエコノミーの進展に大きな寄与をする場合も少なくなく、「非先進諸国」の成長とオールドエコノミー的なシステムの打破に大きく与していることも指摘できる。「経済」が、グローバルなスケールで単一市場モデルに近づいているのだとすると、そこでは、「一物一価の原則」にしたがって、「非先進緒国」サイドの賃金などは上昇し、それに相対して、「先進諸国」サイドのそれは、低下するという現象が生じても不思議ではなかろう。そして、いうまでもなく、こうしたグローバリゼーションが進む「経済」には、すでに指摘したような、諸特徴が備わっているのだとすると、これまでの、「反グローバリズム」的な主張の根拠も揺らぎはじめていることになろう。

つまり、「経済」の次元でも、「社会変動」に相応しいレベルの転換が生じはじめており、そうした転換を端的にまとめれば、スマート・テクノロジーの進展と相互補完的に発展する、「豊穣性」前提型の、地球規模の、「経済」というよりは「ポスト経済」ないしは「生態系」の誕生の可能性の高まりへの転換である。

「自然の終焉」を前提とするなかでの「生態系」の誕生は、スマート・テクノロジーの進展と相互補完的な、新た「社会思想」を含む、「ディスクール」的な次元での転換を希求する。行動経済学的思考の認知や複合現実への関心の高まりなど、すでに、こうした次元での変化の兆しも見られはじめているように思われるが、こうした動きに加えて、ギデンズが述べたように、かつて、デュルケームやマルクスやウェーバーが試みたような次元での取り組みを、改めて、本格的に行わなければいけない状況を迎えているように思われてならない。

このように、その後の「経済」の次元での転換の兆しを加味すれば、「グローバル・コスモポリタン社会」の特徴は、「自然の終焉」を前提とする、スマート・テクノロジーと新たな「ディスクール」的な次元によって現出する、「豊穣性」を基調とした、「ポスト経済」型の社会ということができるように思われる。そして、こうした特徴を備える「社会類型」を加えることで、「社会変動」に注目した人類史のマクロヒストリー的な視点もまた、大きく転換を迫られることになる。また、こうした転換は、同時に、グローバリゼーションと「グローバル・コスモポリタン社会」の理解に対しても、大きなフィードバックを生じさせることになる。

具体的には、「自然の終焉」に向かう軌跡として、これまでの「社会変動」の軌跡をとらえ直すという視点は、換言すれば、「環境社会学的な視座」からの展望をひらくということであり、それは結局、「希少性」前提型社会と「豊穣性」前提型社会の区分を、「文明」と「未開」の区別などに替えてた人類史のパースペクティブの導入を意味し、それはまた、先に触れた、黎明期の社会学的な主たる議論に反して、「伝統社会」と「近代社会」間の断絶よりも、その連続性の方に、むしろ重要性を見出すような、「解釈」の転換に向かうことを意味する。

そして、こうした転換の帰結として、現在直面する諸問題への、より確かな「解釈」もまた創発してくるように思われる。

4．文明史の稜線

「希少性」前提型社会

このように、「グローバル・コスモポリタン社会」と「近代社会」とを分かつものを、「豊穣性」と「希少性」との違いに置けるとすると、こうした区分で、「伝統社会」をとらえ直すとすれば、それは、「豊穣性」ではなく「希少性」を特徴とする側に置くほかはなく、したがって、こうした視座に立てば、「伝統社会」と「近代社会」はともに、それから「農耕・牧畜社会」もであるが、「希少性」前提型社会としての連続性を見てとることになり、両者を「文明社会」として一括することも可能になると同時に、「文明」の定義自体を、「希少性」前提型社会として再定式化することもできることになる。そして、両者を分けるものとして論じられてきた、「近代性」についても、むしろ、「希少性」前提型社会、したがって、「文明」のもつ特徴を「理念化」「純化」させたものであり、「伝統文明」と「近代文明」の差異は、いわば、「段階」に対する「局面」（板垣与一）にあたるものであって、その顕在度ないしは潜在度の違いとして、程度の差としてとらえるべきものに過ぎないということになる。「近代性」という呼称もまた、「文明性」とする方が相応しいということになるのかもしれない。

つまり、文明史に、「希少性」前提型社会の連なりとしての、新たな稜線像を見出すということにもなる。そして、おそらくは、「農耕・牧畜社会」を「初期文明」、「伝統社会」を「中期文明」、「近代社会」を「後期文明」と呼称し直すことも可能なのであろう。

そこで、改めて、「希少性」前提型社会、即ち、「文明」の特徴について考えておこう。

まずは、「文明社会」とは、「垂直的な社会システム」をともない、そして、この垂直的なシステムの維持に絡んで、「権力」が肯定される社会であるが、その根底にあるのが、「希少性」の問題にほかならない。人々が生存に欠かすことができない「資源」が希少だという認識が妥当性をもつなかで、そこに秩序と繁栄とをもたらす唯一の解決策として、「権力」の発生をともなう「垂直的な社会システム」構築の必然性が肯定される。そして、こうした構図は、「伝統」「近代」、それから、「農耕・牧畜社会」の別なく、文明史の稜線を貫くものである。

それから、限定的で、偏向の強い、特異なかたちでの、「労働」を前提とする「生産性」の向上も、「文明社会」の特徴としてあげられよう。「生産性」の向上は、「希少性」を否定する方向に作用しそうにも思えるわけだが、実際には、そうはならなかった。

「文明」の進展にともなって「生産性」「生産量」の向上・拡大が生じたことは確かなわけだが、その際に生産性向上の対象となったものに、強い偏向と限定とがあったことも確かであり、例えば、食糧の次元でいえば、穀物などの特定の食物に限定的、偏向的に、「生産性」「生産量」の向上や拡大がみられるわけで、あらゆるものについて、豊かになったわけではなかった。また、こうした「生産性」「生産量」の向上と拡大は、長期的、潜在的には、人口の増大を支える基盤の構築を可能にするが、そうした人口の増大は、結局、「マルサスの罠」に代表されるような、「希少性」の再生産に寄与する方向に作用することになる。つまり、こうしたふたつの構図がある限り、このよ

うな「生産性」「生産量」の向上・拡大は、「文明社会」においては、「豊穣性」前提型社会への移行にはつながらず、むしろ、「希少性」前提型社会の再生産に寄与してきたということができる。その後の「近代社会」における驚異的な「生産性」「生産量」の向上と拡大後の時点で定式化され、現在もなお権威を保つ、ライオネル・ロビンズによるとされる「近代経済学」の有名な定義自体が、「近代社会」においてもなお、こうした、「希少性」前提型社会の枠組自体を揺るがすには及ばなかったことを、象徴するとともに、裏書きしているように思われる。

そして、「生産性」「生産量」の向上と拡大にもかかわらず「希少性」が担保され、再生産されるなかで、「垂直的な社会システム」もまた維持され複雑に編成されていくことになる。また、「近代社会」への移行によって「民主主義」が進展したこともまた確かであるが、この点についても、どのようなレベルにおいても、程度の差は時に顕著であったにせよ、結局のところ、「水平的な社会システム」に移行できたわけではなく、「垂直的な社会システム」の担保、再生産が行われてきたわけである。

「希少性」が前提になるからこそ、優先権などを確定するための「競争」や、奪い合いを抑制する「倫理」や、それらの正統性を保証する「権威」や、それらを具体的に執行する「権力」や、優先権などを定める「順位」や、将来に備えた「蓄財」などが重要性を担うのであり、それにともなって、「順位」や「努力」、「宗教」や「科学」、「国家」や「民主主義」、「地権」や「資本」などが当然視されることになるわけである。裏を返せば、「希少性」を前提にしなくてよいのであれば、こうした様々なものはすべて、その価値を失う。

「啓蒙主義」に遡る「近代性」の様々な特徴とされるものは、結局、「希少性」を暗黙の前提とするものであるように思われる。ウェーバーのいう「合理性」も「官僚制」も「希少性」を前提としている。「市場経済」も「資本主義」も同様である。「政治」も「経済」も、「希少性」こそが前提でなければ価値をもつまい。

「農耕・牧畜社会」と「伝統社会」を分かつ「都市化」や「制度化」や、「伝統社会」と「近代社会」を分かつ「工業化」や「世俗化」などの段差は、結局、「希少性」と「豊穣性」との間に生じるそれと比べれば、すでにのべたように「局面」的な差異でしかないように思われる。

「豊穣性」前提型社会

それでは、「豊穣性」を前提とする社会とはどのような特徴をもつことになるのであろうか。この区分に入るのは、「グローバル・コスモポリタン社会」と「狩猟採集社会」ということになる。両者を分かつ最大のポイントは、「自然の終焉」の有無である。

改めて確認すれば、先述の通り、「希少性」前提の下で価値をもつものが全て意味をもたないことになる。実際、「狩猟採集社会」の特徴として、「水平的な社会システム」が確認されてきた。「グローバル・コスモポリタン社会」でもまた、「豊穣性」前提になると同時に、「狩猟採集社会」同様、「水平的社会システム」をもつ可能性は高い。そして、「政治」や「経済」も、「競争」や「ランクづけ」なども含め、「希少性」前提の「垂直型社会システム」固有の諸特徴の一切が、意味

を失い、「貝殻制度」化して残存する過渡期をこえることができたとすると、完全に姿を消すということにつながる。

そうだとすると、「グローバル・コスモポリタン社会」への移行は、したがって、グローバリゼーションの進行は、想像を絶するような変化をともなう「社会変動」だということになりそうである。

「グローバル・コスモポリタン社会」と「狩猟採集社会」との違いとして、「自然の終焉」の有無以外にも、「人口規模」などの相違点があげられよう。しかしながら、そうした相違点にもかかわらず、人口70億をこえ、地球規模に拡大した「世界」が、人口150人前後、徒歩で数週間程度の熱帯雨林内のテリトリーを「世界」とするのと同程度の「豊穣性」前提の「水平的社会システム」を備えることが可能だとすると、その底にあるのは、スマート・テクノロジーとそれと相互補完的な「ディスクール」的な次元の存在ということになる。

こうした状況の下で、「スローライフ」化が進み、格差の意味が消失する。シリコンベースのテクノロジーは高度化するが、「成長」というよりは、「内旋」的であり、「進化」というよりは「深化」であり、「大転換」には違いないが、その様相はむしろ「マイクロシフト」と呼ぶに相応しいものである。量子コンピュータなどがコモディティ化する一方で、毎晩キャンドルライトを灯しながら４時間かけて夕食を愉しむような状況が出来しよう。「貨幣」が消え、質的にも多彩な物質的豊かさにアクセスでき、「労働」からの解放さえ進み、「都市化」が消え、グローバルなスケールで星空が戻り、緑化と散住化が進むのだとすると、やはり、ある意味では、「狩猟採集社会」を支えた熱帯雨林的な「世界」への回帰といってもよいような様相を、そこに認めることもできよう。Amazonがアマゾン川流域と同名であることは、意外とことの本質をとらえていて、きわめて象徴的であるようにさえ思われる。

「狩猟採集社会」は、人類学者がまとめてきたように、人類社会の「標準」にほかならず、また、「安定」的な社会であった。「生活習慣病」はなく、「労働」や「人口過密」などにともなう「ストレス」も発生しない。熱帯雨林などの恵まれた環境で、十分なテリトリーが確保され、人口150名程度までの規模であれば、多様な食物を量の偏りなく十分に摂取するのが自然であり、それなりの運動量も必然的に生じ、「労働」の要もなく、「所有」の意味もなく、したがって、「格差」も、窃盗などの「犯罪」も成立しないことになる。そして、人類史の９割をこえる時間、地球上に存在した社会の９割をこえる社会がこのタイプの社会であり、文字通り、人類社会の「標準タイプ」と呼べるものにほかならない。また、150名程度という人口規模は、「ゴリラ」や「チンパンジー」の群れの個体数と脳の容量との相関を算出根拠として類推される「ヒト」の群れの個体数とされる数字に等しいようである。

100年の寿命をもつ住宅を「100年住宅」と呼べるとすると、この手の社会は「10万年社会」と呼べるかもしれない。「伝統社会」は、19世紀までに消滅したとすると１万年ももたなかったことになるし、「近代社会」にいたっては、ウォーラスティンにならって、16世紀前後から1989頃までだったとしても、今度は、1000年ももたなかったことになろう。それに対して、同じく「豊穣性」前提型社会である「狩猟採集社会」同様、「グローバル・コスモポリタン社会」については、「10万年

社会」となる可能性もあるのかもしれまい。

「狩猟採集社会」から「初期文明社会」に移行した最大の理由は、気候変動と人口の増加によるもので、何れにせよ、「豊穣性」を損ない、「希少性」が支配する状況を招来したことによる。しかし、熱帯雨林に留まり、150人の人口規模を維持し続けられた社会は、今世紀まで、辛うじて存続してきたことになる。

同様に、新たな「社会類型」が「10万年社会」となるための条件は、当然ながら存在し、しかも、かなり厳しいものとなろう。「自然の終焉」後の社会は、「豊穣性」を育む「生態系」を自ら再構築し、維持管理しなければならない。「再帰性」が支配する「世界」である。自然再生可能エネルギーへのシフトや再緑化の推進と同時に、植物工場や魚介類の完全養殖、食肉培養、あるいは、遺伝子操作などを通して、「自然」の再生や再構築を目指し、「10万年社会」のレベルへの「再帰」「回復」を期すかたちになる。

環境社会学的視座

こうして、「豊穣性」と「希少性」との対比で、人類社会のマクロヒストリーを整理し直す時に、重要な点は、「自然」との関わり方であることがわかる。熱帯雨林のような場所で、人口がコントロールされる限り、「自然」は、「豊穣性」を担保する要であり続ける。こうした「自然」との関係が崩れはじめる時になって、「希少性」が支配する状況が生じ、そうした状況への対応として、「文明」が生じるわけである。

「自然」が提供できる範囲を超過して、あくまでも相対的にではあるが、人口が増加すると、まずは、適切な人口規模になるように、社会は分裂し、別れた人々が、結局のところ、「グレートジャーニー」の途につくことになる[1]。

したがって、「文明」の発生の問題を含め、「社会変動」の問題を「環境社会学的視座」を据えて、再整理ができるように思われる。

熱帯雨林のような恵まれた環境を喪失した人々は、同等の環境を求めて彷徨し、北方の森林や、東南アジアの密林や、南米の熱帯雨林にたどりついたケースもあれば、その時の状況からすれば、おそらく次善の策として、「文明」の成立にむかうケースも生じたに違いない。そして、どちらのケースにおいても、目的は、喪失した環境を取り戻すことであり、そこで実現されていた「豊穣性」の水準にまで、生活水準などの「回復」を図ることが、本来の目的であったはずであり、結果的に「文明」の成立に向かったケースにおいてさえ、生存の確保を担保することすら危ぶまれるなかで、よくわからないままに、長い時間のなかでの格闘の末に、「文明」の成立にありつけたというのが

1　それは間違いなく悲しい記憶となるはずの出来事であり、おそらくはそのために、どの社会においても、「グレートジャーニー」を連想させるような集合的記憶を継承させる傾向が見られにくいということになっているのかもしれない。別れた人々が、無事、新たな「世界」を構築できた例の方が、失敗し消滅の道をたどった例より多かったということも考えにくい。何れにせよ、環境と社会とのインタラクションの帰結というほかあるまい。

実情に近いのではなかろうか。

こうした視点に立って、改めて、「文明社会」の特徴について見直してみると、次のようなモデルを見出すことが可能である。

まず、「文明社会」は「希少性」を前提とせざるをえないわけで、この時点で、「豊穣性」が実現していたかつての環境を大きく下回る水準にしか到達できていないということになる。これでは、「豊穣性」の水準への回復という本来の願望の達成とは程遠い有様にほかならない。

そこで、「文明社会」独特の、「格差」の設定が重要な鍵となってくる。多くの人々に生存可能な生活水準を担保する一方で、壮麗な建造物の建設や王侯貴族など特権クラスの豪奢な生活様式の確立などを通して、そこだけを見れば、かつての環境をも凌駕する過剰な「豊穣性」を実現した「サンクチュアリ」を括り出すことで、人々の願望の達成を可視化させ、擬似的な「回復」を演出し、それなりの安定を実現させることに成功することになったからである。こうしたシステムを「文明装置」と呼んでもよいし、「文明性」とか「文明意識」として顕在化する、「ディスクール」的なものもまた、相互補完的に定まっていった。

「希少性」を前提とする社会では、「豊穣性」が現出する「サンクチュアリ」を構築し、それを担保に、ほぼ全ての人々に対して、意見の賛否などとは別の次元で、「文明性」や「文明意識」が社会的な正統性をもって用意され、浸透していくとともに、先述の様々な「文明社会」固有の特徴が生まれ、再生産されるようになったのだという構図を見出すことも可能ではないかということになる。そして、すでに述べたように、「近代文明」にいたってもなお、こうした構図から抜け出すことができず、過剰な「豊穣性」を旨とする「サンクチュアリ」にアクセス可能な人々の「民主化」「大衆化」にともなう絶対数の増加に加え、総人口が70億を超過し、しかも、最低レベルの底上げ傾向すら生じるようになってくるのだとすると、かろうじて残存していた「自然」の自律性が破壊され、ギデンズのいう「自然の終焉」を帰結することになる。

「近代性」とは、「文明性」を純化させたものであり、すでに示した構図が、「近代社会」でも踏襲され、しかもそれは、「近代性」によって拡大され、「自然の終焉」を招来するところまで「暴走」したといってよく、こうした負の軌跡を、「進歩」のような「啓蒙主義」的言語体系のなかで語ることは全く意味をなさないように思われる。

「グローバル・コスモポリタン社会」でのスマート・テクノロジーの進展に対して、そこに「啓蒙主義」的な意味での「進歩」を見出し、「近代性」の勝利を宣言することの是非についても、最早、そのこたえは、明らかであろう。「近代性」「文明性」とは対極の枠組みの成立、即ち、「希少性」ではなく「豊穣性」を前提とした枠組みの成立がなければ、スマート・テクノロジーもまた、意味をなさないし、進展の方向性を見失うことになる。

こうした構図の下で議論することによって、「持続可能な成長」とか「持続可能な発展」という標語自身が内包する論理的矛盾もより明瞭になるように思われる。「文明意識」や「文明性」に支えられた「進歩」の感覚のみで理解することは、ただいたずらに「暴走」を招くように思われてならない。

「グローバル・コスモポリタン社会」においては、「自然」「環境」「生態系」について、地球規模での再構築、維持、管理が、最大の懸案事項になるはずである。ここで大切になるのは、「国家」のような「組織」ではなく、「主権者」としての人々そのものであり、従来型の政治経済ではなく、「地球」自体の制御にかかわる次元での取り組みだということになろう。こうした新たな懸案事項の下で、「防衛」「財政」「外交」「社会保障」「景気対策」等々のこれまでの最優先課題は、脱構築され、AIなどによる自動化の進展は、官僚組織、軍事組織の具体的な姿そのものを大きく変え、官民を問わず、「組織」そのものが意味を失い、人々は「労働」から解放され、あらゆるコストが下がり、「狩猟採集社会」同様の「豊穣性」に支配された「水平的社会システム」のなかで「生」を謳歌できる、「10万年社会」の到来とさえなるかもしれないが、「自然」がホストとして厳然と存在し、そのなかで暮らすことができた状況と違って、「豊穣性」を現出させる地球規模の「生態系」の制御を人類が担う必要が出てくる。それを「政治」と呼べば「政治」であり、「経済」と呼べば「経済」であり、「労働」と呼べば「労働」であり、「科学」と呼べば「科学」であるということにもなるのであろうが、何れにせよ、それらは全て、脱構築された上でのそれぞれということになる。換言すれば、「地政学」「マクロ経済学」「政治学」「経営学」などの視座よりも、「環境社会学」的なそれこそが求められるように変わってくる可能性があるということである。

「自然の終焉」後の「世界」にあっては、最早、いかなる意味においても、「神の見えざる手」に期待するわけにはいかず、人類自身が、「自然」による支配そのものを内在化し、「再帰性」の下で、エコロジカルに「生のかたち」（L.ウィトゲンシュタイン）を、グローバルなスケールの「水平的社会システム」を前提として、再構築していかざるをえないのではなかろうか。

5．ま　と　め

ギデンズが当初から指摘していたように、当初問題視され、グローバル化と呼んで議論がはじまった問題系は、単に「経済」の次元の一体化の問題として還元可能なものでもなければ、19世紀や16世紀や人類の誕生の時点に、その起点を求められるようなものなどではなくて、地球規模での本格的なコミュニケーションが可能になり、地球温暖化による気候変動に代表されるような、同じく、地球規模での環境問題への対応責任の共有といった事象が生じ、東西冷戦終結による地球規模での政治的断裂が終息に向かいはじめた、1990年前後以降固有の、しかも、「社会変動」と呼ぶほかないような、社会のあらゆる次元に及ぶ、包括的かつ根本的な変動のプロセスと見做す方が、妥当性が高いように思われる[2]。

その結果、浮かび上がることは、ギデンズが「自然の終焉」と呼んだ、環境社会学的な問題系が、グローバル化の位相の理解に決定的な意味をもつという点である。そして、こうした認識に立てば、「社会変動」の軌跡のなかで、文明史の稜線への新たな知覚が芽生えるにいたることにつながる。

2　エスグラフィー・イン・インダストリーをはじめデザイン人類学的な活動の重要性の高まりも、こうした文脈のなかでとらえることができよう。

換言すれば、1990年前後以降のグローバル化と呼ばれる事象を「社会変動」としてとらえ、それ以前の文明史の稜線を含む、人類史的なスパンにおける社会学的マクロヒストリーをめぐる議論としての社会変動論の射程のなかに位置づけることで、グローバル化の位相への理解が深まると同時に、社会変動論の議論のなかにグローバル化を据えることで、社会変動論自体に、変容をうながし、環境社会学的な問題系の視点をはじめ新たな論点を創発していくことになる。

まとめると、「グローバリゼーション」は「社会変動」であり、今回の変動の特色は、「自然の終焉」にみてとれる。「自然の終焉」は、「文明」の終焉を意味する。「文明」は、「希少性」基調のなかで、「自然」に依存し搾取し続ける構図の下にあった。「自然の終焉」は、「文明」に終止符を打つ。「グローバリゼーション」後の社会が、存続可能だとすれば、「自然の終焉」後の「世界」で、生息可能な「社会システム」が構築されることを意味する。人類史を通してみれば、「自然環境」をめぐる文明史という稜線がみえてくる。「密林」の消滅と再生の物語としての人類史の軌跡ということになる。

それは、「進歩史観」から「回復史観」への理論的シフトを意味しよう。

折しも、ハーバード大学の著名な心理学教授が、「啓蒙」の力は健在であるとした新たな著作を出版することを受けて、『ウォール・ストリート・ジャーナル（WSJ）』が速報スタイルのメールを配信した。著者による関連記事[3]によれば、「民主主義」のさらなる浸透や、生活水準の世界的な向上が、未だに右肩上がりで確認できるという主張を中心とした議論である。こうした動きを「進歩」とみなすか、「暴走」の付随現象とみなすかは、慎重な言葉の選択を求められるところであるように思われる。

本稿の議論に立てば、「豊穣性」前提型の「水平的社会システム」への移行プロセスにおいて、こうした右肩上がりの改善傾向自体は、適合的であり、望ましい変化でさえあるように思われる。だが、問題は、こうした傾向を、きわめて短絡的に、「啓蒙主義」的な「進歩」の証左と看做すこと自体にある。この新刊自体は、大変思慮深い内容であり、好著であるように映る。

それでも、短いWSJのメールだけを目にする者にとっては、上で述べたような取り違えをしかねない恐れは残る。新しい言語体系が必要なのではないかと改めて感じざるをえない。

これまで、おそらく１世紀以上にわたって、「近代の超克論」や「ポストモダン論」をはじめ、様々なかたちで、その度に熱狂につつまれて、耳目を集めながら「近代」や「近代文明」の終焉が繰り返し宣言されてきたが、結局、決着がつかないまま、今日にいたった経緯がある。こうした議論は、最早、狼少年の誹りに値するような観さえあるが、ここにいたって、そうしたややフライイング気味の清談の域とは全く異なった、ごく日常の形而下的な変容として、改めて実感できるようになってきた。その意味で、こうした議論を再開すべき時にいたりつつあるのかもしれない。

3　Steaven Pinker, “The Enlightenment Is Working”, The Wall Street Journal,（https://www.wsj.com/articles/the-enlightenment-is-working-1518191343）2018.2.12取得。

参考文献

・Appadurai, Arjun ([1996] 2010): *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Minneapolis, University of Minnesota Press.（門田健一訳『さまよえる近代：グローバル文化の文化研究』[2004] 2007年、平凡社。）

・Appadurai, Arjun (2013): *The Future as Cultural Fact: Essays on the Global Condition*, London, Verso.

・Brown, Tim (2009): *Change by Design: How Design Thinking Transforms Organizations and Inspires Innovation*, New York, Harper Collins Publisher.（千葉敏生訳『デザイン思考が世界を変える：イノベーションを導く新しい考え方』、2014年、早川書房。）

・Brynjolfsson, Erik and McAfee (2014): *The Second Machine Age: Work, Progress, and Prosperity in a Time of Brilliant Technologies*, New York, W.W.Norton & Company.（村井章子訳『ザ・セカンド・マシン・エイジ』2015年、日経BP社。）

・Crossley P. Lees L. and Servos J. (2012): *GLobal Society: The World Since 1900*, Marceline, Wadsworth Pub Co.

・Downes, Larry and Nunes, Paul (2014): *Big Bang Disruption: Business Survival in the Age of Constant Innovation*, UK, Portfolio Penguin.（江口泰子訳『ビッグバン・イノベーション』、2016年、ダイヤモンド社。）

・Florida, Richard ([2012] 2014): *The Rise of Creative Class*, New York, Basic Books.（井口典夫訳『新クリエイティブ資本論：才能が経済と都市の主役となる』、2014年、ダイヤモンド社。）

・Florida, Richard (2008): *Who Is Your City: How the Creative Economy Is Making Where to Live the Most Important Decision of Your Life*, New York, Basic Books.（井口典夫訳『新クリエイティブ都市論：創造性は居心地のよい場所を求める』、2009年、ダイヤモンド社。）

・Friedman, Thomas, L. (2006): *The World Is Flat*, England, Penguin Books.（伏見威蕃訳『フラット化する世界　上・中・下』、2012年、日本経済新聞社。）

・Freeland, Chrystia (2012): *Plutcrats: The Rise of the New Global Super-Rich and the Fall of Everyone Else*, New York, The Penguin Press.（中島由華訳『グローバル・スーパーリッチ：超格差の時代』2013年、早川書房。）

・Gatt, Caroline and Ingold, Tim ([2013] 2014): "From Description to Correspondence: Anthropology in Real Time", in Gunn, W., Otto, T. and Smith, R.C. (eds.), *Design Anthropology: Theory and Practice*, London, Bloomsbury.

・Geertz, Clifford (2000): *Available Light: Anthropological Reflections on Philosophical Topics*, Princeton, Princeton University Press.

・Geertz, Clifford ([1983] 2000): *Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*, U.S.A, Basic Books.

・Geertz, Clifford (1973): *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*, New York, Basic Books.

・Giddens, Anthony and Sutton, Philip W. (2013): *Sociology: Seventh Edition,* Cambridge, UK, Polity Press.

・Giddens, Anthony ([1999] 2003): *Runaway World: How Globalization Is Reshaping Our Lives*, New York, Routledge.（佐和隆光訳『暴走する世界：グローバリゼーションは何をどう変えるのか』2007年、ダイヤモンド社。）

・Gratton, Lynda (2014): *The Key: How Corporations Succeed by Solving the World's Toughest Problems*, New York, McGraw Hill Education.（吉田晋治訳『未来企業：レジリエンスの経営とリーダーシップ』2014年、プレジデント社。）

・Handler, Richard (1991): "An Interview with Clifford Geertz", *Current Anthropology* 32-5, pp.603-613.

・Iriyama A, Li Y, and Madhavan R. (2010): "Spiky Globalization of Venture Capital Investments: The Influence of Prior Human Networks", *Strategic Entrepreneurship Journal*, 4 (2), pp.128-145.

・Jordan, Ann T. (2013): *Business Anthropology: Second Edition*, Long Grove, Illinois, Waveland Press.
・Karneman, Daniel (2012): *Thinking Fast and Slow*, UK, Penguin Books.（村井章子訳『ファースト&スロー上・下』、2014年、ハヤカワノンフィクション文庫。）
・Leach, Edmund (1990): "Aryan Invasions over Four Millennia" in Ohnuki-Tierney, E. (ed.), *Culture through Time, Anthropological Approaches*, Stanford, Stanford University Press, pp.227-245.
・Marcus, George E. and Fischer, Michael M. ([1986] 1999): *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences*, Chicago, The University of Chicago Press.
・McGrath, Rita G. (2013): *The End of Competitive Advantage: How to Keep Your Strategy Moving as Fast as Your Business,* Boston Massachusetts, Harvard Business Review Press.（鬼沢忍訳『競争優位の終焉：市場の変化に合わせて、戦略を動かし続ける』、2014年、日本経済新聞社。）
・Murphy, Keith M. and Marcus, George E. ([2013] 2014): "Ethnography and Design, Ethnography in Design…Ethnography by Design", in Gunn, W., Otto, T. and Smith, R.C. (eds.), *Design Anthropology: Theory and Practice*, London, Bloomsbury.
・O'neill, Jim (2011): *Growth Map: Economic Opportunity in the BRICs and Beyond*, New York, Portfolio Non Fiction.（北川知子訳『次なる 経済大国』、2012年、ダイヤモンド社。）
・Ong, Aihwa (2006): *Neoliberalism as Exception: Mutations in Citizenship and Sovereignty,* Kansas City, Duke University Press.（加藤敦典・新ヶ江章友、高橋幸子訳『〈アジア〉、例外としての新自由主義』2013年、作品社。）
・Otto, Ton and Smith, Rachel C. ([2013] 2014): "Design Anthropology: A Distinct Style of Knowing", in Gunn, W., Otto, T. and Smith, R.C. (eds.), *Design Anthropology: Theory and Practice*, London, Bloomsbury.
・Pomeranz, Kenneth and Topik, Steaven (2005): *The World That Trade Created: Society, Culture and the World Economy, 1400 to the Present*, London, Routledge.（福田邦夫訳『グローバル経済の誕生：貿易が作り変えたこの世界』、2013年、筑摩書房。）
・Rabinow, P., Marcus, G., Faubion, J. and Rees, T. (2008): *Designs for Anthropology of the Contemporary*, Durham NC, Duke University Press.
・Reich, Robert B. (2015): *Saving Capitalism: For the Many, Not the Few*, New York, Alfred A. Knopf.（雨宮寛他訳『最後の資本主義』、2016年、東洋経済新報社。）
・Redclift, Michael R. and Woodgate (eds.) (2011): *The International Handbook of Environmental Sociology*, Second Edition, UK, Edward Elgar.
・Rifling, Jeremy (2015): *The Zero Marginal Cost Society: The Internet of Things, the Collaborative, Commons, and Eclipse of Capitalism*, New York, Palgrave Macmillan.（柴田裕之訳『限界費用ゼロ社会』2015年、NHK出版。）
・Saide, Edward W. ([1979] 1994): *Orientalism*, New York, Vintage Books.（今沢紀子訳『オリエンタリズム上・下』、2009年、平凡社ライブラリー）
・Sassen, Saskia (2001): *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton, Princeton University Press.（伊豫谷登士翁監訳『グローバル・シティー：ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』、2008年、筑摩書房。）
・Steger, Manfred ([2003] 2017): *Globalization: A Very Short Introduction*, Oxford, Oxford University Press.（櫻井公人訳『グローバリゼーション』、2010年、岩波書店。）
・Suchman, Lucy (2011): "Anthropological Relocation and the Limits of Design", *Annual Review of Anthropology* 40, pp.1-18.
・Watts, Duncan J. (2012): *Everything Is Obvious: Why Common Sense Is Nonsense*, New York, Atlantic.（村井章子訳『偶然の科学』、2014年，ハヤカワノンフィクション文庫。）